

児童虐待防止や子育てママの自殺予防に積極的取り組む。

日本産婦人科医会理事
赤崎クリニックス(奈良県桜井市)

赤崎 正佳 院長



医学部進学者が多く、自ずと産婦人科医を志望するようになりました。いすれは父のところで働こうと思つていましたので、奈良県立医科大学附属病院に入局しました。——奈良県立医科大学の入局時代はいかがでしたか。

実際に臨床の現場に立つと、妊娠の生命を救つたり、瀕死の状態で生まれた新生児を見守つたり、予想とは異なる大きなギャップに気持ちがなかなかついていかない日がありました。ほとんど毎日のように医局に泊まり込んで勉強し、入局1年の間に体重が5キロ減り、ズボンのサイズが合わなくなつた思い出がありますよ。

大阪はびきの医療センター(旧羽曳野病院)、市立東大阪医療センター(旧東大阪市立中央病院)にも勤務しました。

——クリニックに入られた当時は。

奈良盆地の南東端に位置し、日本の古代史のロマンに満ちた古墳群があり、かつては吉野の材木の集積地として栄えました。過疎化が進み、このクリニックが県内最南端の産科医療施設です。それだけに県南部の住民に専門的な医療を含めて満足度をもつていただけるように頑張っています。

——医師になろうと思つたのは。

父が産科・婦人科のクリニックを桜井市内に開業したのが1950(昭和25)年ですから、もう70になります。私は1990(平成2)年にクリニックに入り、翌年から

——クリニックを開業して何年になられですか。

父が産科・婦人科のクリニックを桜井市内に開業したのが1950(昭和25)年ですから、もう70になります。私は1990(平成2)年にクリニックに入り、翌年から

小学生のころは野球少年で、そのあとひたすらテニスに打ち込んでいました。でも、幼いころから昼夜を問わず、出産に立ち会う父の姿を見ていて感動させられました。進学した大阪教育大学附属天王寺高校には

敷地1500坪にわざかベッド数19床とゆつたりとした施設で、個人のブ

ライバシーの保護を意識しています。母体や胎児の危険をすぐに感知するために、24時間体制の分娩監視システムや胎児心拍モニターなどナースステーションで一元管理しています。病室、分娩室、陣痛室、外来の診察室、当直室、院長室に至るまで院内すべての場所でリアルタイムの状況がわかり、スタッフがすぐに対応できるような体制をとっています。もともとフィルターのついた空調システムを配備し、今となつては新型コロナ対策としても無菌室用フィルターの効果が期待でき、安心・安全・快適な環境作りに徹底してこだわっています。

——さい帯血バンクへの提供も。

母体と胎児をつなぐへその緒と胎盤に流れているさい帯血の中には、さまざまな細



▲赤崎クリニック外観

胞に分化する幹細胞が豊富に含まれ、白血病をはじめとするさまざまな再生医療の治療研究の場で活用が期待されています。母

が悪性リンパ腫で亡くなつたときの主治医が血液専門医で、さい帯血バンクにもかかわつておられました。さらに奈良県立医大小児科や輸血部もこの分野では全国でも5本の指に入ります。現在難治性血液疾患にかかる方に役立つ取り組みのひとつとして移植のためのさい帯血を採取し、日本

赤十字社近畿さい帯血バンクに提供しています。

——最近の妊婦さんをとりまく環境は。

時代を追うごとに厳しくなりつつあると感じています。初診に来た妊婦さんが、無事に「おぎやあー」と赤ちゃんの声を聞いて喜ぶまでしっかりと見守ろうとしています。だれもがすんなり、そうなるとは言えません。孤独な環境に置かれ、精神的に不安にかられる妊婦は少なくありません。

子育てママさんが自殺に追い込まれることがないよう安心して出産できる環境を力強くサポートしていくことは関連機関や行政とも連携が欠かせません。

——高度生殖医療センターを併設されていますね。

1994年に体外受精、不妊治療を確立させるために開設し、奈良県では当時初めての施設です。奈良県は日本の人口規模のほぼ1%ですが、出生率は全国でも下位に位置しています。人口が減少すれば、地域の活気も失われ、国勢も落ちていきます。都市部に限らず、地方に住む一般の人々にも生殖医療という専門的な領域を広く提供していきたいと思つたのです。

——児童虐待の問題が深刻化していますね。

いま、県の「子どもを虐待から守る審議会委員」を務めています。世間では

虐待やネグレクトといった悲しい不幸な事件が起つてから初めて「なぜ?」という議論が巻き起こります。なぜ早期に気づかなかつか?なぜだれも手を差し伸べなかつか?なぜだれも手を差し伸べなかつか?なぜ自分は妊娠しないのか、体に疑問をもつ女性が増えています。不妊治療で来られる患者さんの初診年齢も35歳から40歳の間で以前より上がつています。キャリアウーマンとして働くことで晩婚化につながり、出産・育児期間を逸してしまったが、今まで常などがあげられます。妊娠中の女性が不安になつて胎児に影響を与え、虐待の芽が芽つていく場合があり、妊婦をとりまく家庭環境を見守ることから始めなくてはなりません。行政を含めて関係者ができるだけ支援しなくてはなりませんが、虐待防止は虐待がおこらなくて当たり前のことなので、なかなか評価されません。

——不妊をめぐる女性の意識の変化は。

なぜ自分は妊娠しないのか、体に疑問をもつ女性が増えています。不妊治療で来られる患者さんの初診年齢も35歳から40歳の間で以前より上がつています。キャリアウーマンとして働くことで晩婚化につながり、出産・育児期間を逸してしまったが、今まで常などがあげられます。妊娠中の女性が不安になつて胎児に影響を与え、虐待の芽が芽つていく場合があり、妊婦をとりまく家庭環境を見守ることから始めなくてはなりません。行政を含めて関係者ができるだけ支援しなくてはなりませんが、虐待防止は虐待がおこらなくて当たり前のことなので、なかなか評価されません。

——不妊をめぐる女性の意識の変化は。

なぜ自分は妊娠しないのか、体に疑問をもつ女性が増えています。不妊治療で来られる患者さんの初診年齢も35歳から40歳の間で以前より上がつています。キャリアウーマンとして働くことで晩婚化につながり、出産・育児期間を逸してしまったが、今まで常などがあげられます。妊娠中の女性が不安になつて胎児に影響を与え、虐待の芽が芽つていく場合があり、妊婦をとりまく家庭環境を見守ることから始めなくてはなりません。行政を含めて関係者ができるだけ支援しなくてはなりませんが、虐待防止は虐待がおこらなくて当たり前のことなので、なかなか評価されません。

含めての仕事をしていることになります。



▲顎微授精室

——不妊をめぐる女性の意識の変化は。

なぜ自分は妊娠しないのか、体に疑問をもつ女性が増えています。不妊治療で来られる患者さんの初診年齢も35歳から40歳の間で以前より上がつています。キャリアウーマンとして働くことで晩婚化につながり、出産・育児期間を逸してしまったが、今まで常などがあげられます。妊娠中の女性が不安になつて胎児に影響を与え、虐待の芽が芽つていく場合があり、妊婦をとりまく家庭環境を見守ることから始めなくてはなりません。行政を含めて関係者ができるだけ支援しなくてはなりませんが、虐待防止は虐待がおこらなくて当たり前のことなので、なかなか評価されません。

——不妊をめぐる女性の意識の変化は。

なぜ自分は妊娠しないのか、体に疑問をもつ女性が増えています。不妊治療で来られる患者さんの初診年齢も35歳から40歳の間で以前より上がつています。キャリアウーマンとして働くことで晩婚化につながり、出産・育児期間を逸してしまったが、今まで常などがあげられます。妊娠中の女性が不安になつて胎児に影響を与え、虐待の芽が芽つていく場合があり、妊婦をとりまく家庭環境を見守ることから始めなくてはなりません。行政を含めて関係者ができるだけ支援しなくてはなりませんが、虐待防止は虐待がおこらなくて当たり前のことなので、なかなか評価されません。

——高度生殖医療センターを併設されていますね。

1994年に体外受精、不妊治療を確立させるために開設し、奈良県では当時初めての施設です。奈良県は日本の人口規模のほぼ1%ですが、出生率は全国でも下位に位置しています。人口が減少すれば、地域の活気も失われ、国勢も落ちていきます。都市部に限らず、地方に住む一般の人々にも生

殖医療という専門的な領域を広く提供していきたいと思つたのです。

生殖医療の進展はめざましく、ここでも顎微鏡で受精させる顎微授精を行つていまます。かつて体外受精への保険適用を求めて署名運動をしましたが、やつと不妊治療に保険適用される動きになつてきました。地域に根差した産婦人科医として、胎児による以前の受精段階から死体の検分まで、いわば人間の一生の前後、プラスアルファを

女性が受けた性犯罪のうち親告されるのは1割以下です。診断を通して性被害者にすぐにかかわるのが産婦人科医です。性被害者が何度も被害の様子を聞かれることが陥る心的ストレス(セカンドバイオレンス)に配慮しながら、社会復帰できるように支援していかねばなりません。

また五輪や国体に出場する女性アスリートの体の成長とともに気がかりです。長距離

走や体操の選手など体重を制限するためにはホルモン異常、無月経、骨粗しそう症になっている問題があります。コーチの方には専門的な医学知識をもつていただきたい。学校医として産婦人科医がかかわることも大切で、特に女子高では絶対必要だと思います。

——産婦人科医を取り巻く社会的環境は。

産婦人科医は、出産をめぐって拘束時間の長さ、出産をめぐるリスクなどがあつて成り手が少ないといわれてきました。女性の身体は年代によって月経・妊娠・出産更

年期障害などいくつもの大きな転換期を迎えます。さらに女性の長寿化に伴い、診療時間が長くなり、産婦人科医は人間の誕生以前からその終末までとても長期にかかわらなくてなりません。いわゆる女性の健康をめぐって一生涯にフルにかかわっていく喜びがあり、とてもやりがいのある仕事ですよ。

赤崎正佳 院長の経歴

- 1979年 兵庫医科大学卒業
- 同年 奈良県立医科大学附属病院臨床研修医
- 1987年 同 助手(産婦人科)
- 1989年 同 講師(同)
- 1990年 赤崎クリニック医員
- 1991年 同 院長
- 2013年 同 理事長(法人化)
日本産婦人科医会理事、奈良県医師会理事、
奈良県産婦人科医会会长
日本周産期・新生児医学会、
新生児蘇生法「専門」コースインストラクター



▲赤崎クリニック診察室・待合室